59　継子話（簑と七重ね毛）

この島尻から首里に行こうとする。首里に行って帰り、冬の一番寒い日に、継子と実子二人、女の親と三名、まあ首里に行ってるわけですね。首里に。帰りはもう冬の非常に寒い日に大雨が降って、雨が降って。

この継子は簑と笠を着けさしとるわけさ。そして、着物を、一重の着物を一枚で、もう非常に寒い。で、この実子はもう厚い着物を七枚着さしてね。だから雨に濡れないうちは温いから。で、継子と実子とはこう、相当継子は非常に、この取り扱いは獣のような取り扱いしかやらんもんだからですね。実子は、本当の子は厚着を、七枚も着けさしているから雨が降っても大丈夫いうので。いよいよこの、ナバンミ（那波嶺）という坂まで来ておるわけですよ。

そしたら、この継子はですね、簑だから全部流れて、下には水は通らないわけですね。

それでこの子は元気。実子はだんだんだんだん水が

下にしみ込んでいって、もうぶるぶる震えて、凍死してしまったです。この坂(ひら)で。

それで、そこで葬ったわけです。それでここを七重ね毛といっているんです。七つの着物を着せとるもんだから。

字武富　長嶺和男